

蔵原伸二郎『東洋の満月』再論

―「未刊詩集『狼』」と那珂通世訳注『成吉思汗實録』との関係を視座にして―

岩本 晃代*

要旨

蔵原伸二郎の第一詩集『東洋の満月』（昭和一四年）を所収詩篇の成立期をもとに再検証した。本稿では、新たに、『東洋の満月』の中核である「未刊詩集『狼』」に関わる詩篇群に、那珂通世訳注『成吉思汗實録』（明治四〇年）の影響を指摘し、制作当時の蔵原伸二郎の民族意識の特質を明らかにした。

キーワード

蔵原伸二郎、『東洋の満月』、民族意識、『成吉思汗實録』

一、はじめに

最近の近代詩研究において、蔵原伸二郎の詩が再び取り上げられるようになった。ただ、それらは彼の『戦闘機』（昭和一八年七月）という戦時下の詩集について一部言及したものである⁽¹⁾。「戦争詩」（いわゆる戦争賛美詩）は、近代詩研究の重要な課題のひとつではある。だが、蔵原伸二郎の場合、第一詩集『東洋の満月』（昭和一四年三月）に胚胎していた詩的問題を明らかにし

なければ、『戦闘機』をはじめとした「戦争詩」への過程における問題の本質は見えてこないであろう。

拙著『蔵原伸二郎研究』（平成一〇年一〇月）では、『東洋の満月』について、主に、彼が深く影響を受けた萩原朔太郎との比較をとおして論じた。拙著においては、その詩世界の特質として、『原始』を希求する時間意識と動物への変身願望という独自の詩想を指摘している⁽²⁾。

萩原朔太郎の影響とそれからの脱却、時空間の立体的構成や動物への仮託という意識的な方法、そして出身地である阿蘇の自然をモチーフとした風景等は、確かにこの詩集全体を貫いており、晩年まで引き継がれている。だが、重要な詩句である〈東洋〉や〈民族〉の概念については、詩の成立期をふまえて、再考する必要があると考えられる。

本稿の目的は、これまで『東洋の満月』との直接の影響を指摘されていなかった、那珂通世訳注の『成吉思汗實録』をはじめ、蒙古関係書籍の影響を指摘し、蔵原伸二郎の大正末期から昭和初期にかけての詩における〈民族意識〉の特質について明らかにす

* 崇城大学工学部総合教育教授

ることである。これは、今後、彼の「戦争詩」の問題について考察するためにも必要なことだと思われる。

二、詩集『東洋の満月』の成立と構造

第一詩集として『東洋の満月』が生活社から刊行されたのは昭和一四年三月のことである。六十五篇の詩と保田與重郎の「東洋の満月」について、蔵原伸二郎の「悠久なる思想（跋に代へて）」の二つの散文が収められている。

詩集刊行の経緯としてよく知られているのが、昭和九年九月から翌一〇年八月にかけて雑誌「コギト」に分載された章題《東洋の満月》の五十五篇の詩である。その全部に十篇を追補して一つの詩集にまとめられたが、それらの成立年代は大正末期から昭和初期にかけてのものがほとんどである。これまでの先行研究においても指摘されていることではあるが、成立年代は本稿のテーマにとって重要なことであるため、「コギト」掲載の契機を次の「編輯後記」で確認しておきたい。³⁾

本号から掲載する蔵原伸二郎氏の詩稿はすべて氏の旧作である。附言があつたがそれは不用と感じ削つた。旧作であるといふこと、及び中に二三他に所載したものもあるとの意味の文章である。多分五十篇位になると思はれる。氏の近作小説狸犬の中にある二三の詩句の美にふれ、さらに氏の手許に未刊の詩集のあることをきき、これらの立派な詩を隠匿しておくことを極めて不本意と思ひ、所載を乞うて快諾を得たものである。一言連載の事情を附言しておく。

（引用部の傍線は筆者岩本による。以下同。）

昭和九年九月までの雑誌掲載詩を辿つてみると、大正一二年から同一三年にかけて「三田文学」、大正一四年に「葡萄園」に発表されたものがある。拙著『蔵原伸二郎研究』の「資料編」作成以後現在までの調査においても、この時期の補遺はなく、「すべて氏の旧作である」という「編輯後記」の記載のとおりであると推察される。小説「狸犬」に引用されているのは、「胡瓜の歌」と「戦ひをいどむ」の二篇である。五十余篇を一年間にわたって分載した理由については、後に保田與重郎が「私はそれを「コギト」にのせようと思ひ、これほどの詩人の真姿を示すのだから、一ぺんに全部のせるべきだらうかと、肥下氏に相談した。しかし肥下氏のいふところでは、一ぺんにのせるといふことは、私家版の詩集を出すに類し、一度きりに見逃されるかもしれない。しかし二、三篇づつのせてゐては、詩人の印象ものこらず人の注目をそらすおそれがある。数個作品を連載したらよい、といった。私はこの意見は正しいと思ひ、毎回二十頁分程にわけてのせた。そのためだつたか、我々は所期の目的を達し、詩人の姿は世上に大きく印象せられた。」と、肥下恒夫との会話を織り交ぜつつ當時を回想して述べている。⁴⁾

「未刊の詩集」については、後に詳しく述べることにして、まず『東洋の満月』の全体の構成を示そう。内容的には目次掲載の順に次のように大きく三つに分けることができる。

- ① 巻頭詩「蒼鷺」から五十二番目「手紙」までの「コギト」掲載の五十二篇と、五十三番目から五十六番目までの四篇とを合わせた計五十六篇
- ② 五十七番目から五十九番目までの《蒙古少年の話》章題下

の散文詩三篇

- ③ 六十番目「撃滅せよ」から最後六十五番目「江と河」までの六篇

①の五十二篇は、「コギト」に八回に分けて詩集掲載と同じ順序で発表されたもので、送り仮名や句読点の変更、詩句の入れ替えや一部削除等が若干みられるものの大きな改作のあとは見られない。あとの四篇「冬」「家守」「走る車」「潜水夫よ」は、昭和一〇年から同一三年にかけて雑誌に発表されたもので、これらも旧作かどうかは現段階では判明していない。なお、戦後、蔵原伸二郎は、①のみを『東洋の満月』として取り扱っている⁽⁵⁾。

②は、「コギト」の昭和一〇年一月号にまとめて発表されたもので、同じ号には①に含まれている「先づ吾らの風景を」「仏」「感覚の彼岸」「狼」の《東洋の満月》章題下四篇も掲載されており、②については昭和十年当時の作品と推定される。

③は昭和一二年から昭和一四年にかけて制作され「四季」や「三田文学」等に発表されたもので、所謂「戦争詩」の色彩が明らかな詩篇である⁽⁶⁾。

本稿は、先述のように「戦争詩」以前における詩的問題をテーマとするため、主として①を考察の対象とする。

①の成立には、「三田文学」（大正一三年一月）と「葡萄園」（大正一四年一月）に発表された、『狼』という「未刊詩集」が深く関係している。それぞれ初出の題を示そう。

「黒犬よ」「野牛」「灰色の狼」「猫」「九官鳥の幽霊」「病気の蒼鷺」「裸の小児（郷土の六月）」

（「三田文学」大正一三年一月、五九頁〜六七頁）

「ゐもり」「死猫」「病犬」

（「葡萄園」大正一四年一月、二〇頁〜二二頁）

前者の全七篇からは、「黒犬よ」「野牛」「灰色の狼」「裸の小児（郷土の六月）」の四篇が、後者からは、「ゐもり」の一篇が『東洋の満月』に収められている⁽⁷⁾。ここで注意しておきたいのは、これらの詩について掲載の頁に「未刊詩集『狼』より」と敢えて明記されていることである。小田武夫は「文芸都市」（昭和四年一月、四五頁〜五〇頁）の「同人印象記」において、蔵原伸二郎との交流を語っているが、その中で『跳躍せる狼』とは、彼が心底に深く秘めた、未刊詩集の表題である⁽⁸⁾（四九頁）と述べている。小田武夫は当時、他の雑誌未発表の詩も含めた「未刊詩集」を読んでいたのかもしれない。タイトルに少し違いはあるものの「狼」が詩集のテーマであったことは明確である。また、秘蔵していたことについては、先にあげた「コギト」の「編輯後記」の内容とも符合しており、大正末期から昭和初期にかけて制作した詩篇について、蔵原伸二郎は『狼』と題してまとめ、その一部を「三田文学」「葡萄園」に発表し、保田與重郎に請われる昭和九年頃まで、他の詩篇とともに蔵したままであったと思われる。昭和初期からしばらくの間、彼は詩作をはなれて小説の執筆に専念していた時期であった。

ここで、「未刊詩集『狼』」から「灰色の狼」を取り上げる⁽⁸⁾。

灰色の狼

真夜

高原のいただきにありて
灰色の狼は吠ゆる

遠い世界の やみの底に

月のやうな青ざめた病霊を呼ぶ

ああ はかなく呼び上る幸福の幻である

切なる切なる末世の感情にふるえ

いんいんと 遠吠は

暗く かなしく 耳の奥に響けど

このときすでに狼は

くるしき欲情に うえ

山脈の彼方を 蒼ざめ疾りゆけり

見よ！

いん さん と闇に躍り 疾走する

ああ あゝ高原のくさむらから

小つさく 小つさく

黄ろい月が のぼつた のぼつた

「コギト」（昭和一〇年二月）に再び発表された時には、萩原朔太郎の詩風が垣間見える最終五行が削られ、残された部分についても推敲されている。⁹⁾だが、改作の前後にかかわらず、「灰色の狼」は、「高原のいただき」で「吠ゆる」、〈山脈の彼方を 蒼ざめ疾りゆ〉く存在として孤独なイメージが一貫している。蔵原伸二郎の詩には〈鷺〉〈猫〉〈虎〉〈豹〉等、さまざまな動物と一体化するものが多々あるが、詩集のタイトルをあえて『狼』としていることから、〈狼〉は、他の動物とは異なつた特別な存在であると考えられる。

続いて、「コギト」分載の最初の詩篇群で、既に「葡萄園」（大

正一四年六月、一八頁〜二七頁）に発表されていた《東洋の満月》章題下八篇「蒼鷺」「満月」「民族を呼ぶ」「吠ゆる人」「植物の目」「沙漠」「絶望のけもの」「信仰」から、「吠ゆる人」を引く。

吠ゆる人

動物は原始的な存在だ、常に新鮮な感覚を持つてゐる、生れたばかりの感覚だ。

新月は赤児のようだ。

動物の児は新月を見て青い汁をもつ植物の蔭で笑ふ。

俺は若き蒼白の狼だ。

俺は都会にきて思つたのだが、こゝに住む俺の仲間達は、意気地のない、遠く本性を去つた、変形の家畜だ、みじめな自由をしない畜群だ。

月あかりに、食を求めあぐんでさまよう、悲しい家畜の群だ、あはれに青ざめた都会の幽れいどもだ、これら幽れいどもものざわざわめく薄暮のけしきを見よ。

仲間たちよ、早く高原に、山間に、曠野にゆこうよ。

俺は毎夜、歓喜におどる心と、原始的な憂鬱を感じて、月に吠える、星に吠える、吠えて居るうちに、宇宙の心をかんずる、淋しい仲たちの心をかんずる。

世界の生物の心をかんじて月に吠える。

月にさへ吠ゆることを知らない、奇形児になつた都会の仲間よ。――

こゝでは牝達の肉体とその香気は健康ではない、なつかしい動物の牝のにはいを持たない、その生殖器さえ発らつとふ

くらんで居ない、いつもいんきにあをざめて病人のやうだ。
もつと生々した肉体と生殖器とを。

恋しい美しい可愛い、牝よ。

せめて俺の牝よ、都会の人間になるな。

都会の仲間、地べたから草の根をかむことを、その生きた汗を吸ふことをしらない、仲間よ、君達の血管を吸つて見ろ、変色した血液の膿汁がにじみ出る。

俺の魂は、そうしていつも、宇宙の神秘的な力、宇宙の實在に直面してゐる、俺は肉体でそれをじかに感じる。

それ故に遠き地平の底に早くも異変を感じて吠える。
地の果に、近づき来たる新しき世界を見る。

この詩では、動物が「原始的な存在」として神聖化されている。
《俺》は都会で《仲間たちよ、早く高原に、山間に、曠野にゆこうよ》と呼びかけている。《若き蒼白の狼》である《俺》は、《都会》の住人を「遠く本性を去つた、変形の家畜だ」と非難する。彼ら《畜群》とは対照的に、《狼》となった《俺の魂》は、《宇宙の神秘的な力》そして《宇宙の實在》に《直面》し、《肉体》はそれを《じかに感じる》神聖な存在だとうたわれている。冗漫さや未熟さがやや感じられるものの、晩年に到達する蔵原伸二郎の宇宙感覚の端緒が感じられる詩である。

《東洋の満月》章題の詩には、他にも「満月」「民族を呼ぶ」に、《狼》が登場する。とくに「民族を呼ぶ」では、民族意識が《狼》の存在をとおして表現されている。長詩だが、全体を引く。

民族を呼ぶ

感覚は民族意識の直接の表現である、真の感覚は種族の長い長い記憶の露出である。

中央亜細亜の高原に、森林に、植物の東洋に、若き吾々の感覚は目醒むる、活躍する、新らしい動物にゆくわれわれの感情である。

いかに幽暗な閑寂の世界に於いて、流るる植物の情緒を、その光気を、吾々の精神と魂に吸ひ込んでゐることか、ああまた、それ等のものが、さびしく、冥想的な植物のかげに於いて、はつらつと光つてゐることか。

肉体さへも閑寂な世界に輝いたではないか。

仲間よ、われわれがモンゴル族であることを、東洋人であることの記憶を、懐ひ浮べることが出来るか。

真夜、眼を閉ぢて見よ。

東洋の古き深き大森林の奥に、羊歯朶植物類の群生が、いかに生々と清新に、繁殖せるかよ。

そこに一匹の美しい青豹が躍り上る光景を、そこいらの上層にかけめぐり、浮動し焦燥する黄ろい蛾の群集を。

そうして、そのころに於いて吾々の精神が、如何に自由澆漓であつたかを。

吾々の思想が、いかに悦ろこばしく、のぼり来たる新月に羽ばたきかけたかを、仲間達よ。

東洋の感覚をよびさませ、今吾々の周囲のいかに、みにくく不快であることぞ、

東洋人であることの幸福と誇を君は知るか。

冥想と幻想の感覚を、さふらんの如き満月にしたす、原始東洋の植物に目醒めよ。

この幽幻なる幽幻なる思想にまで、新しき跳躍を—吾々は不快なるかの西方の趣味性をこえて、跳躍しよう。

仏陀の想ひをとうして光る、植物の世界へ。

仲間よ、吾々は東洋人である、あまりに、あまりに東洋人である。

仲間よ。まなこを閉ぢて、新らしき東洋の創造への路を見ようではないか、見えざるものは見ることを得るまで断食の苦行を続けよう。

かの森のいん者達の想ひを以つて、新月の光ある東洋の叡智へ。

いま、暗き思想にぬれ、その心は悲しく光り一むれの小動物の群は、新しき住居を求めてさみしい月夜を疾るではないか、新しき世界へ移り行く小動物の群影である。

このとき月かげなき高原のかなたに於いて、いんいんと吼ゆるものは、健康なるあまりに健康なる若き精神の狼である。

東洋の闇に新月をよぶ、吾々の青き狼である。

吾々である。

見よ、いんいんと、新月をよぶ。

種族の感覚をよぶ。

〈呼ぶ〉という行為の主体は「吠ゆる人」のように〈俺〉一人には限定されておらず、最後まで〈吾々〉〈われわれ〉である。〈民族〉という集合体を意識した表現であろう。ここでは民族について、〈モンゴル族〉、〈東洋人〉であることを〈感覚〉によつて思い出させようとしているのである。つまり〈記憶〉を起点とした〈民族意識〉である。冒頭から、〈民族意識〉は〈感覚〉であり、〈真の感覚は種族の長い長い記憶の露出〉だと謳い

起こされている。後に詩集のタイトルにもなる〈東洋の満月〉の〈東洋〉のイメージは、ここでは地理的には〈中央亜細亜の高原〉と結びついている。〈記憶〉をたどれば〈われわれ〉は〈モンゴル族〉であり、その〈仲間〉である〈吾々〉に、〈新しき跳躍〉〈新らしき東洋の創造への路〉を目指そう、と強く〈呼びかける詩〉である。そして詩の最後には、〈高原〉で〈吠ゆる〉存在が〈健康なるあまりに健康なる若き精神の狼〉であることが示される。重要なのは、外面から〈狼〉をとらえた直後に〈東洋の闇に新月をよぶ、吾々の青き狼である。／吾々である。〉と、〈狼〉と〈吾々〉が直結されることである。これは前にあげた「吠ゆる人」での〈狼〉から、〈仲間〉つまり〈民族〉を意識した表現への移行だといえるだろう。〈狼〉は〈中央亜細亜〉・〈東洋〉という詩空間において、さらに〈民族〉を意識して前景化されているのである。

三、那珂通世訳注『成吉思汗實録』の影響

「未刊詩集『狼』」から『東洋の満月』までの〈狼〉に関する詩篇群を、便宜上「〈狼〉詩篇」と名付けることとする。それらの多くにおいて、〈狼〉と、〈狼〉が行為する場である〈中央亜細亜の高原〉のイメージはどのように形成されたものであるのか。藏原伸二郎の〈民族意識〉を明らかにするために、これらのモチーフについての考察が必要である。これまでは、詩の舞台については、藏原伸二郎の出生地である阿蘇の広大な高原のイメージが指摘されてきた。⁽¹⁰⁾確かに〈高原〉のイメージには、阿蘇の高原地帯の記憶の風景も影響しているであろう。しかしながら、『東洋の満月』（前節で分類した①②）全体を覆う〈高原〉のイメー

ジは、阿蘇の高原の風景だけでは説明できないものがある。

先に、「コギト」への詩篇発表の契機が保田與重郎との出会いであったことは述べた。保田與重郎がその経緯を詳しく別に回想したものがある。⁽¹¹⁾

「東洋の満月」が「コギト」へのせられたのは、やはりそのころで、これは蔵原氏が詩稿を私のところへもつてきた。その詩稿といふのは、一度雑誌に発表されたもので、「コギト」へ出すより十年も以前に書かれたものだつた。そのころ私は那賀博士のジンギス汗實録をよんだのが、たまく蔵原氏に旧稿をひき出させる機縁となつた。その本を蔵原氏は早くに愛読したと言つた。私はその詩をよんで非常な感動をうけた。

「ジンギス汗實録」とは、正しくは日本近代史学の祖といわれる那珂通世が訳注した『成吉思汗實録』（大日本図書、明治四〇年一月）のことである。嘉永四（一八五二）年、岩手に生まれた彼は、慶応義塾卒業後、旧制第一高等学校の教授等を勤め、学者としては東洋史学の命名・創始者といわれた。編著として『支那通史』（明治二二年）等も知られている。『成吉思汗實録』の表紙には、「元の太祖太宗の時、漠北の文臣無名氏撰りたるを、日本明治三十九年、盛岡の那珂通世訳して注したる、成吉思汗實録。東京築地活版製造所にて印刷し、大日本圖書株式会社にて発行す。」と記されている。モンゴル帝国のチンギス・ハーンについて、その先祖からオゴタイ・ハーンに至るまでの年代記であるが、伝説・伝承もかなり混在している。

先の回想によれば、蔵原伸二郎と交友するなかで、この書が話

題となり、「コギト」発表に至つたようである。

この歴史上の人物チンギス・ハーンが実際に詩の中に登場するのは、詩集『東洋の満月』の中では「だつたんの女」と「内蒙古軍におくる歌」の二篇である。本稿では、後者は分類上③にはいるため、「だつたんの女」を取り上げる。⁽¹²⁾

だつたんの女

ジンギス汗は青白い狼の仔である

ヴェーラもその遠い子孫だ

だからヴェーラは無智でやさしく跣足で歩く

ヴェーラの目は栗色で

ヴェーラの髪は栗色で

ヴェーラのあすこも栗色で

ヴェーラの夢の底には

荒涼たる流沙の景色がうつり

中央アジア諸民族の不思議な夢々が

重なり重なり花咲くだらうよ

ヴェーラは勇ましいだつたん女だ。

『東洋の満月』に所収の際は六行目の〈あすこも栗色で〉が削除されたのみで他の部分については改稿されていない。〈ヴェーラ〉という〈だつたんの女〉は空想上の人物であろう。⁽¹³⁾〈ジンギス汗〉の〈遠い子孫〉である彼女の〈夢〉の風景は〈荒涼たる流沙の景色〉であり、子孫たちは〈中央アジア諸民族〉と呼ばれている。ただ、ここで最も注意したいのは、冒頭の〈ジンギス汗は青白い狼の仔である〉という一行である。現在ではよく知られた

チンギス・ハーンの伝説ではあるが、当時、出版されていた関連書籍と、その表現との関連を検討する必要がある。

大田三郎『成吉思汗』（博文館、明治三四年六月、七頁）には、チンギス・ハーンについて「世界陸軍、戦術戦略史上、中世期に於て、特筆大書すべき者は、其れ成吉思汗か。」とあり、中世の英雄的存在として記されている。そして、現在では『元朝秘史』という題で知られているが、日本で最初の注釈を附した翻訳書は『成吉思汗實録』であり、その「巻の一」の本文は、次のように始まる。⁽¹⁴⁾

成吉思汗の根原。

上天より命ありて生れたる蒼き狼ありき。（注は省略）その妻なる惨白き牝鹿ありき。

先にあげた保田與重郎の回想によれば、『成吉思汗實録』を「蔵原氏は早くに愛読した」という。「未刊詩集『狼』」の詩篇制作当時に読んでいた可能性は極めて高いといえる。また、大正六年二月刊行の、順徳李文田注『元朝秘史註』（朝鮮研究会、二頁）には、同じ部分が次のように記されている。

天一个の蒼白の狼と一个惨白の鹿とを生じ相配す。

詩集『東洋の満月』には、先に引用した「吠ゆる人」「民族を呼ぶ」「だつたんの女」のほか、「満月」「何ぞ！」「狼」「灰色の狼」「戦ひをいどむ」等の「（狼）詩篇」があり、「（高原）の（狼）」は、『東洋の満月』の世界において、中心的ともいえる重要なモチーフである。

制作当時には発表されなかった「狼」を、「コギト」（昭和一年一月、八九頁）から引いてみる。この詩は『東洋の満月』では、集の中ほど二十七番目におかれている。

狼

雪原の奥に、遠く 牝をよぶ狼の声である いんうつなさかななる吼声である。野獣の感ずる奇怪な現象の奥なる実在の世界である。宇宙の変異を実感する孤独なる動物の魂である。病霊のおののきである 暗夜雪原の果におののき跳躍する青い狼である。私である。

私は孤独に病んでゐる 私は飢えてゐる。あらゆるものに欲望する。ああ私は欲望するものに敢然としておどろきかきおどろかかかる。

かの美はしき女に、生々しき肉体に、不思議な思想に、かの東洋的な朱黄色の果実に、

あゝ そうして現象の底の底なる、地獄の満月について遠く遠く吠えかかる。

暗夜の地平を越えて遠く遠く跳躍する。

（宇宙の変異を実感する孤独なる動物）つまり（跳躍する青い狼）は（私である）と、主体との一体化が断定的に表現されている。ほかの（狼）が（高原）を走るのとは異なり、この詩では（雪原）が舞台となつてゐる。冬の厳しい寒さのなかで（欲望するものに敢然としておどろきかきおどろかかかる）（狼）（私）は、（現象の底の底なる、地獄の満月）を強く求めている。宇宙感覚が（狼）をとおして描かれている詩である。

以上述べてきたように、〈中央亜細亜〉の〈高原〉、そこに〈跳躍する〉〈青い狼〉は、『東洋の満月』の世界を形成する中核的な存在である。その〈狼〉の原型は、愛読していたといわれている『成吉思汗實録』の〈蒼き狼〉であり、〈跳躍する狼〉の舞台は阿蘇の高原の記憶のみではなく読書体験によって複合的にイメージされている。

四、「狼」詩篇から『東洋の満月』までの〈民族意識〉

満月の夜に狼に変身する狼男の伝説は広く知られている。しかし、蔵原伸二郎の〈狼〉は、さらに〈東洋の満月〉の夜に〈跳躍する狼〉である。「狼」詩篇は、中世の歴史上の人物でモンゴル帝国を築いたチンギス・ハーンへの強い関心から生れたもので、彼の西洋批判の根源ともつながっている。

次の詩「戦ひをいどむ」（「コギト」昭和一〇年四月、三七頁）は、小説「狸犬」（『目白師』ぐろりあ・そさえて、昭和一四年一〇年）にも引かれ、『東洋の満月』では、四十二番目におかれている。

戦ひをいどむ

かくてわれわれの民族感覚はわれわれの強健なる原始に目醒めた。世紀末の病都会を飛び出した若き東洋の狼は、全世界の文明に向つて戦ひを挑む。新しき東洋の精神は、新しき野生主義は、あらゆる反対のものに、然らざるものに向つて怖しい戦をよぶ。

見よ！ 狼火は上つた。青く若き狼は、りんりと爪牙を

といた。戦ひのために、しのゝめのばらいろの空気の中に、現れ、先づ草の根のにがい汁を吸つて精気を養つた。

かくて狼は吠ゆる。跳躍する。

戦ひをいどむ。

文明病の世紀末に向つて、
実に慄慄極りなき狼である。

対西洋、文明批判が直線的に謳われており、詩の達成度は高いとはいえない。だが、大正期から昭和初期にかけてのモダニズム文学隆盛の流れに、この詩を置いてみると、〈若き東洋の狼〉の雄姿は、強い独自性を放っている。冒頭に、〈われわれの民族感覚はわれわれの強健なる原始に目醒めた〉とあるように、対西洋、対文明の思考は、極めて〈感覚〉的なものである。その〈野生主義〉は、〈あらゆる反対のものに、然らざるものに向つて怖しい戦をよぶ〉という極端で単純な思考様式をもつ。〈民族意識〉の概念については、先に引いた「民族を呼ぶ」でも、〈長い長い記憶の露出〉つまり〈感覚〉であると、極めて観念的であった。

〈東洋〉という詩句についても、同様のことがいえる。「狼」詩篇をはじめ『東洋の満月』に表現されている〈民族意識〉や〈東洋〉は、読書体験による歴史上の人物への憧憬が先行し、明確な概念というよりは、浪漫的イメージによる詩句だといえるだろう。

本稿で②に分類した《蒙古少年の話》章題下三篇（「コギト」昭和一〇年一月、六一頁〜七五頁）の「山猫と月の話」「馬の話」「鷲の話」は、〈サムソ〉という名の少年を主人公とした物語風の散文詩であるが、この〈蒙古〉は、歴史的地理的に把握されているものというより、〈狼〉のいる〈中央亜細亜〉の〈高原〉

のイメージと阿蘇の記憶の風景とが結びついたものである。

《東洋》の《民族主義》をうたう蔵原伸二郎の浪漫的詩世界は、未熟さを含みつつも、制作当時の詩壇においては、その特性を評価できる。しかしながら、詩集としての刊行が、空白期間をおいて、昭和一四年であつたことが、『戦闘機』の詩人としてのイメージを強く持たれてしまうことにつながってしまったのではないだろうか。

次に引用する「東方の狼」(「若草」昭和一二年二月、五二頁～五三頁)は、先にあげた詩「狼」(「コギト」昭和一〇年一月)を改作し、副題を付けて再び発表したものである⁽¹⁵⁾。

東方の狼

東洋の満月・序詩

これは孤独なる若き牡の歌である

とほくに牝を呼ぶこゑである

そのいんうつなる さかんなる吼声である

宇宙の神秘を実感する動物の魂である

魂のおのきである おのき跳躍する青い狼である 私で

ある 東方の若者である

私は餓えてゐる あらゆるものに餓えてゐる

私はあらゆるものを欲求する 欲求するものに縹然としてお

どりかゝり跳りかゝる

かのうるはしき肉体に かの不思議な思想に

さうしてこの宇宙の奥なる 現実の奥の奥なるかの幽幻なる

実在について

あゝ 遠くとほく 吠えかゝる

わたしは餓えたる あまりに孤独なる 東方の狼である

先に引用した「狼」と比較してみると分かるように、散文詩形であつたものから詩形が変化している。また、《雪原》という舞台は消失してしまっている。大きく変化したのは、傍線部で《おのき跳躍する青い狼である 私である》に、《東方の若者である》という詩句が続いているところである。だが、その二年後刊行の『東洋の満月』では、もとの散文詩「狼」の方が所収されている。

時局下に、彼の《感覚》的《民族意識》に一時的にせよ変化が見られたともいえるが、ここでは、副題に「東洋の満月・序詩」と明記されることによって「狼」詩篇⁽¹⁶⁾が、『東洋の満月』の詩世界の中核であることを強調しておきたい。

五、おわりに

以上述べてきたように、「狼」詩篇⁽¹⁷⁾の詩世界には、チンギス・ハーンという中世の覇者のイメージが色濃く付帯している。ドーソンの『蒙古史』(富山房)刊行は、明治四二年五月で、蔵原伸二郎が慶応義塾大学仏文科に在学中には、その訳者である田中萃一郎が教員として東洋史を担当していた⁽¹⁸⁾。また、大正四年七月には阪井重季・猪狩又蔵『成吉思汗』(博文館)も刊行されており、蔵原伸二郎がこれらの書籍に関心をもった可能性は低くはないと思われる。さらに大正一三年一月には小谷部全一郎『成吉思汗は源義経也』(富山房)が刊行されて論争となり、チンギス・ハーンへの関心は、一般的に高まっていた時期でもあつた⁽¹⁹⁾。

「狼 詩篇」制作当時における〈民族意識〉そして〈東洋〉の概念は、イデオロギーによるものではなく、読書体験を通じた〈成吉思汗〉への強い憧憬が中心となり、〈蒙古〉への浪漫的イメージを喚起されて形成されたものだと考えられる。

「悠久なる思想（跋に代へて）」の問題をはじめ、『東洋の満月』刊行時とその後、〈民族意識〉がどのように変質していったのかということについては、今後の課題とし、別稿で考察することとしたい。

注

- (1) 和田博文『神』への架橋―蔵原伸二郎『戦闘機』と神風特別攻撃隊（『飛行の夢』藤原書店、平成一七年五月、三四一頁〜三四六頁）では、『戦闘機』所収のエッセイ「祭りの文学」をあげて、『蔵原伸二郎が語る「最初の祭典」とは、『古事記』『日本書紀』が初代天皇と伝える神武天皇の、大和地方の平定を指している。高天原から九州の日向に降った瓊瓊杵尊（にぎはきみ）の曾孫の神武天皇が、瀬戸内海を東進して大和の土豪たちを征服し、紀元前六六〇年に橿原宮で第一代の天皇に即位したという、神話伝承的な物語である。大東亜戦争を「第二回目の莊嚴なる国平けの大祭典」と捉える発想は、平定の対象を、大和地方からアジアに、「世界中」に拡大することで可能になる。」と述べ、さらに「この詩集が時代思潮を反映していたことは、第四回詩人懇話会賞を受賞した事実からも明らか」との見解を示している。また、宮崎真素『戦争のなかの詩人たち―「荒地」のまなざし』（学術出版会、平成二四年九月、七六頁〜八〇頁）は和田博文の論をふまえて、「祭りの文学」は、当時の思想の一局を見事にあぶり出している。「戦ひ」は「わが民族の祭典」であり、そこに「国体の根元」や「民族の精神」が見いだされる「神聖なる

国祭り」だとするもの」と述べ、鮎川信夫との相違を指摘している。

- (2) 拙著、岩本晃代『蔵原伸二郎研究』（双文社出版、平成一〇年一〇月）の第一章第三節『東洋の満月』の世界」参照。

- (3) 「編輯後記」の署名は「Y」であるが、保田與重郎の記述と思われる。『保田與重郎全集 第四十巻』（講談社、一九七頁）にも収録されている。

- (4) 保田與重郎『近代終焉の思想』（『日本浪漫派の時代』至文堂、昭和四四年一二月）にある。引用は、『保田與重郎全集 第三十六巻』（講談社、昭和六三年一〇月、二二五頁〜二二六頁）に拠る。

- (5) 『現代日本詩人全集15』（創元社、昭和三〇年一〇月、三一九頁）に、「著者自身の意向に従い「山猫と月の話」「馬の話」「鷺の話」「撃滅せよ」「遠征軍の歌」「内蒙古軍におくる歌」「亡民」「空谷」「江と河」の九篇だけが削除された」とある。よって、蔵原伸二郎は戦後、あえて②と③をはずし、①のみを『東洋の満月』としたかったことがわかる。

- (6) 各詩の発表雑誌は次の通りである。「撃滅せよ」（四季）昭和二年一〇月、「遠征軍の歌」「内蒙古軍におくる歌」（三田文学）昭和二年一〇月、「亡民」「空谷」（四季）昭和一四年一月、「江と河」（初出不明）。

- (7) 「黒犬よ」は、「コギト」（昭和九年一二月）発表時から「胡瓜の歌」と題名が変わり、『東洋の満月』の他、戦後の詩集『乾いた道』（薔薇科社、昭和二九年五月）にも収められた。順次、改稿されているが、それについては、前掲書『蔵原伸二郎研究』第三章第二節に詳しく述べている。

- (8) 引用は、特にことわらない限り、初出に拠る。

- (9) 「コギト」（昭和一〇年二月、四四頁〜四五頁）掲載分は次のとおりである。「真夜／高原のいただきにありて／灰色の狼は吠ゆる／

遠い他界の闇の底に／見えざる病霊のやうな月をよぶ／はかなく呼
び上ぐる幸福の黄色い幻である／切なる 切なる末世の感情に餓え
／いんいん 遠吠は／暗くさびしく耳に残れど／このときすでに
狼は／山脈の彼方を蒼ざめ疾りゆけり」

- (10) 山本捨三「蔵原伸二郎」(『現代詩人論』桜楓社、昭和四十六年四月)、宮内俊介「蔵原伸二郎―『東洋の満月』小論―」(『熊本の文学 第二』審美社、昭和六〇年九月、二〇三頁―二二三頁)はじめ、蔵原伸二郎と出生地である阿蘇との関係については、広く指摘されてきた。

- (11) 注(4)に同じ。

- (12) 制作当時に雑誌発表が認められない詩篇の一つ。よって引用は「コギト」(昭和一〇年七月、五五頁―五六頁)に拠る。なお前掲書『蔵原伸二郎研究』(第一章第三節、六八頁)でも、『成吉思汗實録』の影響を指摘しているが、保田與重郎の言説をもとにして触れたのみであり、「狼」詩篇」との関係进行分析するまでには至っていないかった。

- (13) 前掲書『蔵原伸二郎研究』(六八頁)で「だつたんの女」のモデルが、かつて蔵原伸二郎が交際していたロシア人女性である可能性を指摘している。

- (14) 本文の前には、「元太祖在時、漠北文臣無名氏、以蒙古文委兀児字撰述。明洪武十五年、翰林侍講火原潔等、漢字音訳、俗語旁訳。日本明治三十九年、盛岡那珂通世、以和文直訳附校注。」(ルビは省略)という訳注の経緯が記されている。この『成吉思汗實録』は昭和一八年九月、筑摩書房から再版され、その序文は門弟の有高巖が書いている。有高巖は、原文について、「もと蒙古語を^{ツル}兀児^ル字で書いてゐたのを明初に漢字に書き改めたが、その際先づ漢字を音標文字として蒙古語を音の儘に記し、次に各語に漢字の傍訓を施して

その意義を示し、別に本文の大意を部分的に漢文に要約せるものを附してゐた」と解説し、大意の漢文のみで人名や事実の誤謬がある『元朝秘史』に対して、この『成吉思汗實録』は「蒙古語法に基き厳密に修訂せられたのであり、その内容がわが『古事記』に該当するといふ趣旨から古体の仮名交り文に翻訳せられ、これに精緻な注釈を加へ」(二頁―三頁)たものと述べている。

- (15) 前掲書『蔵原伸二郎研究』の資料編「作品年譜」中に、この詩は無い。新資料である。なお、本文は総ルビであつたが、引用にあつてルビは省略した。

- (16) 蔵原伸二郎の慶應義塾大学在学中の資料は限られており、現在わかつているのは、大正八年四月七日に文学部予科に入学したものの予科一年を三回した後に、大正一三年に本科(仏文)一年に進級したと、昭和二年に本科三年に進級していたが、九月一日付けで除籍となつてのことである。理由は授業料未納であつた。大学へはほとんど通っていないかつたようである。学科も異なり、田中萃一郎と直接の接触は認めがたいが、高名な歴史学者でもあるため、著作についての知識はあつたと思われる。

- (17) このチンギス・ハーンが源義経であるという説に対して、すぐに國史講習会編『成吉思汗非源義経』(雄山閣、大正一四年五月)が出されて論争となり、小谷部全一郎は、続編として『成吉思汗は源義経也 著述の動機と再論』(富山房、大正一四年一〇月)を刊行した。なお、大正一三年刊本は、『東洋の満月』刊行と同年の昭和一四年六月に、『成吉思汗は義経なり』と題して厚生閣から再刊されている。

引用文等については、原則として旧字体は新字体に改め、仮名遣いは原文どおりとした。